ひまわりからのメッセージ

162号
2025.6.8
NPOひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター
発行人：中野たみ子

移りゆく世を思いつつ
～御神木の送迎～

私が住んでいる所は、金物の神である金山彦命を祀る南宮大社の近くで、宮代という地名は御社（みやしろ）から転じたと聞いたことがあります。

今日は、御樋代木奉送迎という神事がありました。ご存知のように天照大神を祀る伊勢神宮は二十年に一度建てかえられ（式年遷宮）、ご神体である八咫の鏡（やたのかがみ）を入れる器の御樋代（みひしろ）を作るための特別な木材が、木曽から切り出されたのです。そして伊勢神宮に運ばれる途中に南宮大社に立ち寄られることになったとのことでした。

トラックに積まれた御神木は三本。大鳥居に到着のあと、「太一」と書かれた法被を着た千人程の人が白いロープを引いて先導していかれました。途中には宮代小学校の子ども達も日の丸の旗を振ってお迎えしていました。

「太一」ってどういう意味なのかと調べていたら、「万物を含有する大道」「天神・北極大帝のこと」、つまり「物事、事象、世界総ての中心」という意味であるとのことです。天照大神が八百万の神々の中心であることを象徴することばとして式年遷宮に用いられるようになったそうです。

遠い昔、宮代小学校は南宮大社の東側、今の斎館の地にありました。日本には神風が吹くと言って戦争の勝利が信じられていましたから敗戦後の神社は今ほどのにぎわいはなく楼門前の石の大鼓橋は子ども達の格好の遊び場でした。そして、社殿で子ども達が餅花づくりをしたこともありました。大らかな時代でした。

世の中は変わっていきます。この十年の変化を考えると二十年後の式年遷宮はどんな形になっているのでしょう。もっともっと少子化は進んでいくでしょうから、今年のように二台の御輿を担ぐことができるのでしょうか。物はあふれ、生活は豊かになったように見えて、その実、福祉のほころびがあちこちで見受けられる昨今です。皆が心豊かに、お互いに思いやりをもって生きていってほしいものだと御神木を見送りながら心に祈ったことでした。

私は仕事柄、西濃圏域の園や小学校、中学校、高等学校などに訪問させていただくことが多くあり、今回はその中で心にとまった出来事を三つ紹介させていただきます。

子どもの発達に考慮した園での取り組み

私は、色々な所でお話をさせていただく機会があります。学校の先生、園の先生、支援員の方、療育者、保護者の方など聞いて下さる方々も様々です。

講演の中で最近の私が特に話題にするのは、子どもが育つ環境の変化です。核家族化、少子化、子どもの遊びの変化公園からなくなっていく遊具、子ども集団の変化などに加えて、便利グッズが子どもの発達に及ぼす影響にも言及してきました。

抱っこひもの多用は、赤ちゃんがママにしがみつくという手の機能をうばっていく可能性があることや、水道の蛇口の変化は子どもたちの手首の回旋にも影響を与えていること等も折りにふれて話しています。私が肢体不自由児施設であったひまわり学園に赴任した当時、手にマヒのある子ども達のために水道の蛇口は左右に動かすものでした。今では、園でも学校でも家庭でも水道の蛇口がねじ式のものは殆ど姿を消してしまいました。子ども達が日常トイレに行って手を洗い、外遊びから帰って手を洗い、一日に何回も行っていた手の動きはやらなくても良くなりました。おまけに子ども達が持参する水筒は、プッシュ式になっていて、ここにも利便性が優先されています。

この園にはプッシュ式水筒はないの?!

ところが、ある園に伺った折のこと、「みんな、お茶にしようね。」と言う先生に応えて「ハーイ。」と子ども達が持ってきた水筒を見て驚きました。プッシュ式の水筒は一つもなく全てがコップ付きでした。「どうしてですか?」と尋ねる私に園長先生は、「いつも子どもの手の発達の話を聞いていたので、手首の回旋という動きもこれなら自然に身につくと思って全町でそうしました。」とのこと。保護者からの反対もなかったとのことでした。「でもね、コップに注ぐ時にお茶をこぼすこともありますけど、それも子ども達の発達にとって大事なことと思っています。」と、保育士さん達の仕事が増えたことも笑いながら報告して下さいました。

そんな私達の傍で子ども達は真剣な表情でコップにお茶を注いでいました。しっかり手元を見る、そして注ぐことは「目と手の協調」という力も育んでいくことでしょう。

さくらさくらんぼのリズム運動

最近の子ども達は体幹がしっかりしていないし、姿勢保持が続かないと言われます。その中には多動症などの特性のために体が自然に動いてしまう子もいますし、「じっとしていなさい」と叱られても困ってしまいます。

先日、あるこども園を訪問しましたら「さくらさくらんぼリズムの時間ですよー」の呼びかけがあり、子ども達はホールに集ってきました。

「さくらさくらんぼ」と聞いて、私は斎藤公子さんという教育者を思い出しました。彼女が開いた保育園は「はだし保育」を実践し、脳科学をベースにしてリトミックという音楽リズムも実践していました。リトミックというのは、本来は、音楽を聞いて自由に身体表現をしていくもので、演奏者には即興演奏が求められました。私も大学時代、夏休みになると国立音楽大学へ出かけ、自分のピアノの技を磨いたものでしたが、保育園や療育の場では、曲の変化や強弱、音の高低などを聞き分けて身体表現することをリトミックと言って実践していました。走る、止まる、スキップ、ギャロップ。

などの中に両生類這い這いという動きがあります。

ご存知のように人間の赤ちゃんは未熟な状態で生まれてきて、二足歩行ができるようになるまで人間の進化の過程を辿ると言われています。這い這いをする赤ちゃんは、方向を換える時に親指で床をけるのが普通です。ところが足指を使わずに這い這いする赤ちゃんもいて、実は発達の上では気になるところです。乳児期のそり返りの寝返りや、視線の合いにくさ、共感の少なさ、母子の愛着の希薄さ等々、将来に向けて心配の要素となるものは、乳児期の気づきが大切だと言えます。

さて、さくらさくらんぼリズムを実施している園の子ども達の様子は衝撃的でした。リズムに添った身のこなし、走る速さ、両生類這い這いではどの子も親指を使う方向転換をマスターしていました。そして何よりうれしかったのは、子ども達の顔が生き生きと輝いて見えたことでした。園長先生自らが子ども達と一緒に走り、ジャンプし、子ども達の体の変化を実感しているとのことでしたが、先生と一緒にリズムを楽しむことは、子ども達の心の中にきっと楽しい思い出として残っていくことでしょう。

遠い昔、斎藤公子さんの園を訪ね、別れ際に握手した時の手のやわらかな温かさを思い出したことでした。

中学校の支援学級での何気ない支援について

中学校の支援級の授業を見せていただいた時のことです。

先生は「では、今日は教科書の57ページと58ページをやりましょう」と言いながら黒板にP57・P58と書かれました。生徒たちはすぐに教科書を開き、授業が始まりました。

その光景を見ながら不破高校に通級指導が取り入れられた当時のことを思い出しました。聞くことの苦手な生徒も多く、視覚支援の必要性があったことから、先生方は板書に　　ページ数を書かれ、ノートに書くべき事項にはチョークの色を決めておられました。確か学校全体で決めておられたと記憶しています。

その一方、ある小学校で一年生の授業の時、まだ10までの数も学んでいない時期に「28ページを開いて下さい」と指示が出された時の光景も忘れられない記憶です。子ども達は口々に「どこ？」「わかりません」と言うので先生は一人ひとりの席を回り、教科書の28ページを開いてあげておられました。黒板に28と書いて「こう書いてある所を探してね」と言われれば済むものを、いちいち子どもの席を回り、授業時間の何分かを費された一年生の担任の先生は、自分は十分な支援をしていると思っておられたのだろうか……と疑問に思ったものでした。

中学校の先生の何気ない自然な視覚支援は、おそらく生徒の実態や特性を知りつくしていらっしゃるが故の行動であったのでしょう。授業の進め方もとても素敵で先生自身が楽しく授業をしていらっしゃる様子にこちらまで心豊かにさせていただいた気がしました。

「中学生なのだから支援のしすぎだろう」と思われる方もいらっしゃるかもしれません。先日お会いした企業の方が「学校での支援のやりすぎは、学校の中では出来ているように見えても就職した時には困ることが多い」とおっしゃっていましたが、本人が考えること、少し考えればできること、自分で気づけることなど大人の指示に従うだけではなく、主体的に行動できる力も必要なのでしょう。適切な支援は、子どもたちの実態把握と、そこに至る「なぜ？」の分析が欠かせないと思いました。

〈7月予定〉

2日　ピアサポート

14日　親の会

26～27日　木村順先生の学習会

木村先生からTelがあり、「今回は参加費をいただき本当に学びたい人だけに参加してもらいましょう」と、ご提案がありました。「学ぶ」ということの意味を改めて考えさせられました。皆さん、どうぞいらして下さいね！